

四季折々の森の植物や鳥・虫などの動物を紹介します

1. コウホネ (スイレン科)

「ふれあいゾーン」のふれあい池や近くの水路に黄色い花をつけている「コウホネ」が見られます。

コウホネの名前の由来は、根茎が白く、白骨のように見えるため「河骨(こうほね)」と名付けられました。長い花茎の先端に1つだけ黄色の花をつけます。花の外側は5枚の顎があり、花後、水中に没して緑色になり、種子ができます。

葉は水中葉と水上葉があり、水上葉は長い葉茎を持ち大きな卵形の葉をしています。

ふれあい池のコウホネは、自然に生えたものではなく20

03年に大きな植木鉢に苗を植えて植木鉢ごと池に沈めたものです。用水路のコウホネは、植木鉢から池に逃げ出し、さ

らに池から水路へと逃げ出したものです。今では、水路のコウホネは環境にうまく適応したようで、元気に繁殖しています。



2. クズ (マメ科) 役にたっているけど、嫌われてもいる植物。いたるところで見られます。

クズは日のよく当たる草原、川原、森の縁などを一面に覆って生育する大型のツル植物です。クズは秋の七草にも数えられている身近な植物で、私たちにとってもいろいろと役に立ってきました。葉は牛などが喜んで食べます。茎には丈夫な繊維があって葛布がつくられてきました。地下にある長さ2mにもなる太い根を水の中でたたくと、大量のデンプンがとれます。このデンプンは葛粉と呼ばれ和菓子の大切な原料になります。

クズの根は葛根と呼ばれ、漢方薬の葛根湯の原料として有名です。また、発汗、解熱、鎮痙などの薬効があり、風邪を引いた初期の時に服用するとたいへんよく効くと言われていいです。

この時期から9月にかけて咲く赤紫の花はよい香りがしてとても美しいのですが、生い茂るクズの葉に隠れてあまり見ることはありません。

このようにクズは人の役に立っているが、農家や林業家の嫌われものです。すごい繁殖力で地を覆い、立木からまわって枯らすことがあるからです。びわこ地球市民の森においても、植樹した樹木に絡みついているクズを切ることは大切な育樹作業のひとつです。



3. イタドリ (タデ科) 別名はスカンボ、森のあちらこちらで見られます。

イタドリは私たちが子どものころ、スカンボと呼んでいました。肥よくで湿り気のあるところを好んで生えます。

春の芽生えたばかりの茎はタケノコのような姿で引っ張るとポンと音がして折れます。この皮をむいて食べるとさくさくしてとても酸っぱいあじがします。昔の子ども達はおやつがあまりなかったのでときどきスカンボを見つけて食べました。

若い茎や葉は水にさらして酸味を取り、山菜としておひたしや揚げ豆腐などと煮物にしました。

イタドリは薬用植物の本には必ず載っていて、根茎は虎杖根 (コジョウコン) という生薬の名前があります。便秘や利尿薬として薬効があると言われます。イタドリと言う名前は「痛み取り」から付いたと言われています。どこかにぶつかって怪我をしたときに、イタドリの葉をよく揉んで患部に貼ると出血と痛みが取れるからと言われています。イタドリは19世紀半ばにヨーロッパに渡来し、当時の園芸ブームにのり高値で取引されたようです。今は、厄介な外来種として処理に困っています。



4. ミシシッピーアカミミガメ (ヌマガメ科)

ふれあいゾーンの水路には、ミシシッピーアカミミガメがたくさん生息しています。アメリカ南部原産の外来種で、頭の横の耳のような位置に赤い斑点があるのでアカミミガメの名があります。子どもがミドリガメの名でペットショップで売られていますが、大きくなると甲羅の長さが30cmを超えるものもあり、家庭から放流されました。在来種のカメの生息を脅かしていると言われています。



5. トビ (タカ科)

トビはタカ科の鳥です。猛禽類の中では数が多く農村地帯ではどこでも見かけます。

ピーヒョロロと鳴きながら、上昇気流に乗ってほとんど翼を羽ばたくことなく上空を旋回しています。トビの大きさは嘴から尻尾の先まで60~65cm、翼を広げると150~160cmほどです。

トビの識別は上空を滑空しているときに翼の前方に白斑が見られることと、尾羽が長めで飛行する状況で凹型になったり台形になったりするので、同じ猛禽類のミサゴなどと区別できます。

トビが空を飛ぶのは、地面のエサを探すためで、視力が優れていてはるか上空からエサを見つけることができると言われています。エサは動物の死骸やカエル、トカゲ、ヘビ、魚などです。

トビは本来は臆病な性格で、エサが共通するために数羽のカラスに攻撃されるのをよく見かけます。

びわこ地球市民の森がオープンした2001年当時、外で作業をしていると、近くの樹上に営巣していたトビに警戒され背後から頭を襲われたことが数回ありました。

